Akita University

特別寄稿

Akita University

2024.03.01

英語のメカニズム：品詞、文法役割、意味役割、そして文構造[1]

佐藤心咲[2]
秋田大学教育文化学部附属中学校
星　宏人
秋田大学教育文化学部附属中学校

本稿は古代ギリシャから続き西洋で広く使われている伝統的教育スタイルである「対話」を通した、附属中学校における教育実践の結果です[3]。2023 年の夏、教育文化学部の学生が教育実習のため附属中学校を訪れ、3 年生のクラスで英語の授業をしていました。星が授業参観に行くと、最後列に座っていた佐藤心咲さんが「他動詞って何ですか」とか「5 文型って何ですか」とか、星にとても真っすぐな質問をしてくれました。教室で全てを説明することはできないので、校長室で説明することになりました。それから約 3 カ月ほぼ毎週火曜日の放課後、心咲さんは校長室に来て上記のような英語学習の基礎的知識に関する質問に留まらず言葉の根本に関わる質問をし、星ができるだけ誠実に答えようと試みました。とても楽しく豊かな言語哲学的対話でした。英語を使って英語を教えることの難しさと偏りをどう補うべきかを考えさせられるものでした。心咲さんからの希望もあり、2023 年 12 月 6 日には附属中学校の 3 年生全員に心咲さんと星とで対話形式による英語の授業を行い、それまでの二人の考察の内容を伝える機会が与えられました。校長であった星にとっては附中での珍しい英語の授業でとても楽しいものでした。基礎的知識の伝授に留まらず、生徒たちが自分たちで学び合うよい機会となりました。本稿は 2023 年度後期に星が秋田大学の学部生のために担当した英語学特論で使用され、学部学生から「無味乾燥に感じられる文法書の説明とは異なり、教科書では説明されていない言葉の根幹にも関わる本稿の対話によるやり取りは分かりやすく、将来の英語教育に役に立つと思う」との心温まる感想が寄せられました。

心咲さんと星とでこの原稿を作成後、附属中学校の令和 6 年度から令和 8 年度までの研究主題は『豊かに学ぶ～教科の本質につながる「問い」を核として～』となると知りました。心咲さんによる英語の本質につながる「問い」を核として、心咲さんと星が豊かに学び合ったこの教育実践「対話」を附属中学校に捧げたいと思います。

キーワード：英文法、言語学、言語哲学、品詞、文法役割、意味役割、文構造など

１．はじめに：品詞と文法役割

星：言葉は私たちの頭・心の中にあるシステムです。私たちは言葉を使って考えたり、コミュニケーションを取っ

[1] The Mechanism of English: Categories, Grammatical Functions, Semantic Roles, and Clause Structure.
[2] Sato, Misaki & Hiroto Hoshi, Akita University Junior High School.
[3] 佐藤心咲さんと星とで作成した原稿に阿部幸一先生（愛知工業大学名誉教授）、阿部潤先生（元東北学院大学教授）、伊藤たかね先生（東京大学副学長・特任教授）、西岡宜明先生（九州大学教授）と由本陽子先生（大阪大学名誉教授）が目を通し、貴重なコメントをくださり、問題もご指摘くださいました。心咲さんと星から先生方に心からの感謝を申し上げます。伊藤先生と由本先生のご指摘に基づき、第 4 節の現在分詞と過去分詞の用法の説明の部分は大幅に改訂しました。しかしながら、まだ数々の問題が残っており、それらの問題の責任は全て星にあります。最後に何度も何度も附中校長室に来て、たくさん純粋で刺激的な質問をし、星の回答に常に瞬時に素直な意見を返してくれた心咲さん、どうもありがとう。

たりしていますが、私たちの頭・心の中にある言葉というシステムを実際に見たりすることは現時点ではまだできません。ですから、どんな言葉の文法であれ中身が本当に分かっているわけではありません。アナクシマンドロスやコペルニクスやダーウィンやアインシュタインやハイゼンベルクが私たちの世界の見方を大きく変えたように[4]、何十年後、何百年後、何千年後に、きっと誰かが私たちの言葉の見方を激変させることでしょう[5]。

ということで、英語というシステムの中身もよく分かっているわけではありませんが、現時点で「英語のメカニズム（仕組み）に関して、基盤となりうる考え方、見方を少しだけ一緒に考えてみましょう。言葉に関してたくさんある考え方や見方の中の一つの紹介で、できる限り皆さんが英語の教科書で学んだことに沿って話をします。

星：今から2千数百年以上前、日本の縄文時代頃にギリシャの哲学者アリストテレスは、言葉を分析するためには、品詞、文法役割という二つの重要な概念があることを提唱しました。

(1) 品詞：名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞など
(2) 文法役割：主語、述語、目的語、補語、修飾語など

心咲：品詞というのは〇〇詞で、文法役割というのは〇〇語なんですね。〇〇詞と〇〇語って、文法の基礎になっているような気がするのですが、品詞や文法役割って何なのでしょうか。違うと思うのですが、自分ではうまく説明できません。いろいろな考え方があるのでしょうけど、できる限りシンプルな説明をお願いしたいです。

星：〇〇詞は単語についているラベル名(スポーツ選手の背番号)で、〇〇語は基本的に文中でのポジション名（スポーツの場合はチーム内のポジション名）という考え方はどうですか。

心咲：えっ。〇〇詞などの品詞というのは一つ一つの語の持つ固有、独自のラベル名（背番号）で、〇〇語など文法役割は語独自の性質ではなく、基本的に文の中のポジションの名前なのですか。その考え方、初めて知りました。

星：そうです。かなり多くの言語学者がこんな感じで考えていると思います[6]。だから、辞書で単語を調べると、〇〇詞のような単語の品詞名（ラベル名・背番号）は記載してありますが、主語や目的語のような〇〇語の文法役割名の記載はありません。〇〇語という概念は文がなければ生じない概念だから辞書には記載できません。

心咲：なるほど。じゃ、その考え方では〇〇詞（ラベル名・背番号）と〇〇語（文中のポジション名）は意味とは関係ないのでしょうか。

星：素晴らしい質問です。主語や目的語のポジションに入っている単語は、もちろん、それぞれが何らかの意味を持っているでしょう。20世紀初頭にドイツの哲学者、フレーゲが提唱したようにそれらの語は文法によって動詞の意味に組み込まれ、文全体の意味が決まる感じではないでしょうか。ですから、これから紹介する考え方においては、〇〇詞のような品詞（ラベル名や背番号）や〇〇語のような文法役割（文中のポジション名）自体は意味概念ではありません。〇〇詞や〇〇語の名前の意味に惑わされないよう注意してください。例えば、ある単語の品詞が動詞であるからと言ってその語が必ず動作の意味を持つということはありません。

星：ところで通常、happyもhappinessも意味は「幸せ」で同じだけど、happyは形容詞でhappinessは名詞と分析されます。どうしてだと思いますか。

心咲：もしかして、次のような違いがあるからでしょうか。

(3) happy=>happier（比較級形）=>happiest（最上級形）
(4) happiness => なし（比較級形）=> なし（最上級形）

心咲：happyは形容詞だから、(3)に見られるように比較級形も最上級形もあります。でもhappinessは名詞だから、比較級形も最上級形もないというのはどうですか。

---

[4] Rovelli (2019, 2021)など参照。

[5] Lyons (1981)などの言語学の教科書における言語学の定義は以下のものです。
(i) Linguistics is the scientific study of language.（言語学は言語の科学的研究です。）

[6] Kempson et al. (2001), Cann et al. (2005)等は品詞という概念を一切使わない言語理論を提案している点でユニークです。

星：とてもよい分析だと思います。英語では形容詞、副詞のラベル（背番号）を持っている単語にだけ、比較級形(…-er)、最上級形(…-est)がありえます[7]。ですから、英語をマスターするためには品詞（ラベル名・背番号）を覚えることも大切です。他の品詞（名詞、動詞など）の特徴についても考えてみてください。

心咲：はい。名詞は-sや-esを付けて複数形を作り、動詞は-sを付けて三人称単数現在形を作ったり、-dや-edをつけて過去形、過去分詞形を作ったりすると思うのですがどうでしょうか。

星：その通りです。それらが単語の品詞（ラベル名・背番号）の特徴です。ですから、品詞をマスターしていないと、比較級形、最上級形、複数形、現在形、過去形、過去分詞形などをきちんと作ることができません。

心咲：教科書の本文には品詞の情報がありませんが、教科書の最後の部分に単語と品詞が記載されていることを私、たった今発見しました。これからは教科書の最後の部分も使って英語の勉強をしようと思います。

星：とても良い考えだと思います。

2. 英語での文の組み立て方の基本

星：次に下記の英語の基本五文型について考えてみましょう。よい勉強になると思います。

(5) 英語の基本五文型

I. [SV] （主語 動詞）
II. [SVC] （主語 動詞 補語）
III. [SVO] （主語 動詞 目的語）
IV. [SVO_1O_2] （主語 動詞 目的語$_1$ 目的語$_2$）
V. [SVOC] （主語 動詞 目的語 補語）

星：主語、動詞、補語、目的語の文中のポジションはどこですか。

心咲：全ての文型で主語は左端の文頭のポジション、動詞は左から2番目のポジションにあります。第二文型では動詞の右隣に補語があります。第三文型では動詞の右隣に目的語があります。第四文型では目的語が二つあって、動詞の右隣に目的語O_1があり、そのまた右隣に目的語O_2があります。第五文型では動詞の右隣に目的語があって、その右隣に補語があります。これって重要なのでしょうか。どうやって私たちの英文解釈や英作文に応用したらいいのか分かりません[8]。

星：ただ基本的に英語では(5)のように文を組み立てることは事実です。今後英語で文章を書いたり話したりする際など覚えておいてください。きちんとした英文を作ることができます。

心咲：私、フィーリングで適当に英文を書くのではなく、きちんと英文を書きたかったので嬉しいです。でも(5)の英語基本五文型について一つだけ質問があります。英

---

[7] 形容詞や副詞であっても、長い単語には-erや-estは付加しません。しかしながら、happinessと同程度に比較的長い単語であっても、例えばunhappyには比較級形（unhappier）と最上級形（unhappiest）があります。

[8] (5)のI, II, III, IV, V文型が示すように、SやVやCやOが単純に並列に連なって文を形作っているとは考えにくいのではないでしょうか。雪の結晶が美しい構造を持つように、例えば(5)IIIの第三文型は下記の(i)、(ii)のような形を持っているのかもしれません。

(i) [S [VO]] (例：[Misaki [studies English]])
(ii) [[SV] O] (例：[[Misaki studies] English])

(i)と(ii)の形、大きく異なりますから、注意してください。(i)では、S（主語）と結びつくのは右隣のV（動詞）ではなく、VとO（目的語）が結びついた述部[VO]です。（(i)は自然言語にアリストテレスが提案した文構造です。）一方、(ii)ではSは右隣のVと結びつき、結びついた[SV]がOと結びついています。重要なことに、(i)と(ii)におけるSのポジションは文の左端にある点で同じように見えますが、(i)のSはVと直接に結びついたポジションにはなく、(ii)のSはVと直接的に結びついたポジションにある点で全く異なっています。さらに、(i)と(ii)におけるOのポジションは文の右端にある点で同じように見えますが、(i)のOはVと直接的に結びついていますが、(ii)のOはVと直接的に結びついたポジションにない点で全く違っています。従って、言語学における「文中のポジション（文法役割、つまり○○語）」は(A)単に左から右への語順だけではなく、(B)どのように文中の要素（語など）が結びついているか（つまり構造）も考慮し判断します。ここでは文中の要素の左から右への順番だけでポジションを決めて話を進めますが、(A)と(B)両方とも、覚えておいてください。(i)と(ii)とどちらの文の形（文構造）が正しいのか、両方とも正しいのか、それはなぜなのかなど非常に興味深く、言語学者の間で議論される重要なトピックですが、これは別の機会に考えましょう（脚注14参照：(17), (18)、(20)参照；(23), (24), (25)参照）。

語の基本五文型では、どうして品詞(○○詞)と文法役割(○○語)が混じっているのでしょうか。動詞って品詞(ラベル名・背番号)で、主語、補語、目的語って文法役割(文中のポジション名)ですよね。

星: それもとても良い質問です。英語の基本文型を二つの違う概念である○○詞と○○語をミックスしないで文法概念(文中のポジション名の○○語)だけ使って改訂したら、(6)になります。Pは predicator(述語(動詞))の頭文字です。

(6) 英語の基本五文型(文法役割だけ使用の改訂版)

I. [SP] (主語 述語)
II. [SPC] (主語 述語 補語)
III. [SPO] (主語 述語 目的語)
IV. [SPO_1O_2](主語 述語 目的語$_1$ 目的語$_2$)
V. [SPOC] (主語 述語 目的語 補語)

心咲: なるほど。述語(動詞)(Predicator)というのが、文の左端から2番目のポジションの名前だったのですね。知りませんでした。ということは、英語では五文型全てで主語(S)が文の左端の文頭のポジションに、述語(動詞)(P)が文の左から2番目のポジションにあるのですね。私、個人的には(6)の英語基本五文型の改訂版の方が好きです。だって、(6)はシステムとして私たちの英語の教科書で紹介されている(5)の英語基本五文型よりも一貫性があります。(6)は語のラベル(品詞)ではなく文中の語のポジションにこだわって、英語を捉えようとしているのがよく分かります。いつか時間のある時、○○詞という品詞だけ使って英語の基本五文型を書いてみることにも挑戦しようと思います。とてもシンプルな(6)とは違って、かなり複雑になってしまうような気がします。だって、P(述語)のポジションには動詞しか入らないみたいだけど、S(主語)のポジションには、少なくとも名詞、不定詞、動名詞が入ります。補語のポジションには、少なくとも形容詞、名詞。目的語のポジションには、少なくとも名詞、不定詞、動名詞が入りますから。

心咲: 少し理解が深まりましたが、英語の基本五文型って私たちの英語学習に本当に大切なのでしょうか。マスターしなければならないのでしょうか。

星: 言葉に文型(構文)があるのかないのか。英語の基本文型は三つなのか、五つなのか、七つなのか、それ以上認めるべきなのか。もちろんいろいろな意見がありますが、基本五文型分析を理解することは大切です。基本五文型の要点をマスターすると、英語の仕組みの理解が深まりますし、私たちの身の周りのかなりの出来事を簡潔にきちんとした文で表現できるようになります。意味に配慮して、皆さんが慣れ親しんでいる(5)にある基本五文型を復習してみましょう。

星: 先ず第一文型。

(7) Mary smiles. (S V) (メアリーはいつも笑顔。)

星: 登場人物は何人ですか。

心咲: Mary、一人。

星: 動詞(V)の smiles はどんな意味の働きをしていますか。

心咲: smiles は登場人物である Mary の特徴を説明(叙述)している感じです。

星: それじゃ、第二文型。

(8) Mary is pretty. (S V C) (メアリーは可愛い。)

星: 登場人物は何人。

心咲: 一人。

星: どうして。

心咲: 登場人物は Mary の一人だけ。なぜなら補語(C)の pretty は主語(S)の Mary の特徴を説明(叙述)するから。ちょっと待ってください。(7)の第一文型(S V)の動詞(V)の smiles と(8)の第二文型(S V C)の補語(C)の pretty は両方とも意味的に主語の特徴を説明していて、とっても似ている感じで興味深いです。

星: その通りです。動詞(V)と補語(C)って意味的に似ているのですよね。言語学者はこの意味の類似性を捉えようとして、動詞(V)を述語、補語(C)を述語的補語と同様の用語を使って呼んだりもしています。

星： ところで、目的語を取らず、主語と現れる動詞を自動詞と呼びます。(7)の smile(s)は主語を取る自動詞。(8)の is は S（主語）と C（補語）と一緒に使う自動詞と、学習者用辞書に記載されています[9]。

心咲： そうですか。英語には二つの種類の自動詞があるんだぁ。

星： その通りです。英語には少なくとも二つの自動詞があります。

星： 次に、第三文型。

(9) Mary pushed John. (SVO)（メアリーはジョンを押した。）

星： 登場人物は何人。

心咲： 二人。Mary と John。

星： 第四文型。

(10) Mary gave John a present. (SVOO)（メアリーはジョンにプレゼントをあげた。）

星： 登場人物は何人。

心咲： Mary と John の二人と a present の物一つ。だから、合計3つ。

星： 最後に第五文型。

(11) Mary made John happy. (SVOC)（メアリーはジョンを幸せにした。）

星： 登場人物は何人。

心咲： 第五文型（SVOC）の登場人物は二人だけ。なぜなら(11)の補語（C）の happy は目的語（O）の John の気持ちを叙述・説明していて、Mary と John 二人だけが登場人物だから。

星： 正解です。まとめると、主語や目的語から何が登場人物かが分かり、動詞（V）や補語（C）がそれらの主語や目的語がどんな登場人物なのかを意味的に説明しているということでしょうか。言葉って主語や目的語のように登場人物を指し示す要素とそれらが文中でどのような意味的な役割をするのか説明する要素の基本的に二つの要素から成立しているのかもしれませんね[10]（第 1 節のフレーゲの提案参照）。シンプルで興味深いシステムなようですね。ここまで勉強したことを踏まえると、目的語と一緒に使われる動詞、つまり他動詞は英語には何種類あると辞書に記載されていると思いますか。

心咲： 三つ。目的語（O）だけを取る SVO 文型の V。目的語を二つ取る SVOO 文型の V。目的語と補語を取る SVOC 文型の V です。

星： だから、英語をきちんと使えるようになるためには、少なくとも二種類の自動詞と少なくとも三種類の他動詞の違いをマスターすることが大切です。

心咲： でも、どうして少なくとも二つの自動詞とか少なくとも三つの他動詞っていつも「少なくとも」って入るのですか。本当はもっと多くの自動詞や他動詞があるのでしょうか。

星： その通りです。英語の基本五文型には二つの自動詞と三つの他動詞しかありませんが、英語にはそれ以上の自動詞や他動詞があります。

心咲： じゃ、基本五文型で扱われていない自動詞や他動詞はどうやって勉強したらいいのでしょうか。

---

[9] 学習者用辞書における記載とは異なり、言語学では am, is, are などの be 動詞は、主語(S)を取る自動詞と区別して連結詞(copula)と呼ばれ、下記のような主語(S)を取り C（補語）と共起する自動詞とは区別されています。

(i) The sky became red. （空が赤くなった。）
S V C

[10] 次の例文についても考察してみましょう。

(i) Mary is a student.（メアリーは生徒だ。）
S V C

例(i)は第二文型(SVC)で、名詞表現は Mary と a student の二つですが、登場人物は Mary の一人です。補語(C)の a student は主語(S)の Mary を叙述・説明しているからです。このように文中の名詞表現の数と登場人物の数とは必ず一致するわけではありませんから注意してください。

星：中学生用の辞書でいいですから出会った動詞を辞書で一つ一つ調べて丁寧に学んでください。本当に英語の力をつけるためには辞書の使い方を学ぶことも非常に重要です。今度、辞書の使い方の指導もしますから辞書を持ってきてください。紙辞書の最初の部分には「辞書の使い方」の説明が付いているし、たくさんの情報を一度に見れるし、紙辞書は電子辞書よりも使いやすいですからできたら紙辞書を使ってください。

心咲：はい。今日私は英語の基本五文型の骨格を作り出し文中で中心的な働きをしているのは二種類の自動詞、三種類の他動詞ではないかと思いました。主語が文の中心ではないとも思いました。だから、きちんと英文を組み立てるためには動詞の特徴を学ぶことはとても大切だと思います。今後は基本五文型を超えた応用文型もマスターしたいです。紙辞書は重くて大変ですが、今度持ってきますからぜひ辞書の使い方も教えてください。

3. 能動態と受動態：文法役割と意味役割の対応

心咲：第三文型、第四文型、第五文型から受動態（受け身文）を作ることができる気がしますが、当たっていますか。

星：その通りです。

心咲：ただ私、これに関してあまり自信がありません。能動態と受動態ってどう違うのでしょうか。復習してもらえたら嬉しいです。

星：能動態では「動詞の基本形（基本五文型で使用する動詞の形）」を使用し、原則的に「動作の主体（動作主）」が主語になります。

(12) 3 種類の能動態

III. She PUSHED him. (SVO)
動作主　動作の受け手

IV. She GAVE him a present. (SVOO)
動作主　動作の受け手　物

V. She MADE him happy. (SVOC)
動作主　動作の受け手

心咲：分かった。能動態では主体的、能動的に動作に関わる人が文の最初のポジション、つまり主語のポジションに入るのですね。だから能動態っていうのですね。興味深いです。

星：能動態を使って私たちヒトは世界の出来事を動作に主体的に取り組む人にスポットライトを当てて描写しているのかもしれません。

星：受動態では「be 動詞＋他動詞の過去分詞」を使って、基本的に「動作の受け手」が主語になり、「動作の主体」が省略可能な(by ○○)になります。受動態を使って、私たちは世界の出来事を、「動作の受け手」にスポットライトを当て、「動作の主体」を前置詞 by を使って弱めて文の後ろの方に置くか、あるいは隠して描いている感じです。

心咲：私たちヒトにはいろいろな世界の見方があって、能動態と受動態に私たちヒトの世界の見方の変化が映し出されているのでしょうか。

星：そうかもしれません。非常に興味深いアイデアですが、それが本当かどうか私には分かりません。次に(13)で(12)の III, IV, V 文型に対応する受動態を考えてみましょう。

(13) 英語の非標準文型 (Ø は目的語の空所位置)

III'. He WAS PUSHED Ø (by her).
動作の受け手　(by 動作主)

IV'. He WAS GIVEN Ø a present (by her).
動作の受け手　物　(by 動作主)

V'. John WAS MADE Ø happy (by Mary).
動作の受け手　(by 動作主)

心咲：「動詞の基本形」が能動態を、「be 動詞＋他動詞の過去分詞」が受動態を作り出している感じですね。ここでも動詞が非常に重要な働きをしていることが分かりました。そして能動態と受動態の違いを理解するためには、品詞(○○詞)や文法役割（○○語）とは別の、「動作の主体（動作主）」とか「動作の受け手」とか「物」など、それぞれの動詞が持つ意味概念をマスターしなければならないのですね。この新しい概念は動詞などが持つ意味

役割って言うのでしょうか。

星：そうです。(14)を見てください。

(14) 意味役割：動作主、動作の受け手、物、目的地点、出発点、時、場所など

心咲：私、何か重要なことを発見した気がします。能動態と受動態とでは文中で動詞の持つ意味役割が○○語などの文法役割（文中のポジション）に結び付けられる仕方が劇的に変わっていることに気づきました。ですから、能動態や受動態の意味を理解するためには動詞の形（「動詞の基本形」か「be 動詞＋他動詞の過去分詞」か）に注意し、主語や目的語のポジションに入った単語が文法によって動詞のどの意味（役割）と結び付けられるのかを理解できなければならないのですね。動詞の形がサインとなって意味役割の位置が劇的に変化するなんて、バレーボールでセッターが出すサインに従ってのポジション・チェンジみたいで面白いです。受動態では「動作の受け手」によるポジション・チェンジにより、「be 動詞＋他動詞の過去分詞」の直後の目的語のポジションが空所（Ø）になるのも非常に興味深いです（(13)の III', IV', V'の Ø 参照）。「be 動詞＋他動詞の過去分詞」を骨格とする受動態では、他動詞が目的語を取らない自動詞（あるいは形容詞）に変化しているかのようです。

星：そうです。能動態と受動態における、動詞の形、意味役割の劇的な配置の変化、「be 動詞＋他動詞の過去分詞」の直後の空所（Ø）など、自分の言葉で詳しく説明してみてください。それができたら、能動態と受動態の違いがかなりマスターできたことになると思います。

心咲：えーと。「動詞の基本形」が能動態の骨格を作り、原則的に「動作主」が主語ポジションに入り、「動作の受け手」が目的語のポジションに入ります。一方、「be 動詞+他動詞の過去分詞」が受動態を作り、「動作主」が弱められ by を伴って文の後ろに置かれるか、隠されるかして、「動作の受け手」が主語のポジションに入って、スポットライトを浴びる感じです。「動作主」は by を伴って出来事の背景に回される感じがします。これによって、受動態では「be 動詞＋他動詞の過去分詞」の直後の目的語のポジションが空所（Ø）になり、他動詞が自動詞化（あるいは形容詞化）されたように見えます。能動態と受動態における意味役割の劇的なポジション・チェンジと目的語ポジションの空所（Ø）化など今まできちんと捉えていませんでした。非常に興味深いです。[11]

星：ひとつの優れた能動態と受動態の説明だと思います。[12] [13]

---

[11] 空所（Ø）の存在を意識することは英語を習得するためには非常に大切です。下記の例文は全て、目的語を取らなければならない他動詞の後の目的語のポジションが空所（Ø）になっているため適格な英文ではありません。

(i) *[Mary loved Ø].
(ii) *[Mary talked to Ø].
(iii) *[Mary gave him Ø].
(iv) *[Mary gave Ø a book].
(v) *[Mary made Ø happy].

しかしながら下記(I')～(v')に見られるように、(i)～(v)と全く同様の空所（Ø）を含む文が関係代名詞節としてなら英文の一部として完璧に使用できます。実はこれが関係代名詞節のもっとも重要な特徴の一つです。マジックのようでしょう。これは英語の関係代名詞節は必ず一つ空所（Ø）を含まなければならないからです。

(i') This is the boy [Mary loved Ø].
(ii') This is the boy [Mary talked to Ø].
(iii') This is the book [Mary gave him Ø].
(iv') This is the boy [Mary gave Ø a book].
(v') This is the boy [Mary made Ø happy].

[12] 能動態(12)の III, IV, V 文型の主語のポジションに入っている語は、意味的に「動作主」の役割を果たしています。一方、受動態(13)の III'、IV'、V'の主語のポジションに入っている語は「動作の受け手」の意味役割を持っています。従って、「主語というポジションは常に動作主の意味を持つ」という考えは間違いであるということになります。

[13] 本文で説明したことに加えて、受動態をマスターする上で重要なことを二つ挙げると次のことがあります。先ず、日本語の「動詞＋られ（受け身の助動詞）」と英語の受動態は非常に異なります。例えば、日本語の受動態(i)は適格な文ですが、

(i) 彼は赤ん坊に泣かれた。
(ii) *I was cried by a baby.

(ii)にある英文は適格な受動態ではありません。(i)に示されるように日本語の受け身の助動詞「られ」は「泣く」のような自動詞とも結合できますが、英語の受動態では(ii)に見られるように「be 動詞＋自動詞の過去分詞」(cried)は使えないからです。

次に(12)と(13)に見られるように、英語の受動態には必ず対応する能動態があります。故に、下記のように受動態(iii)は、

4. 現在分詞と過去分詞：文構造と曖昧文[14]

心咲: 授業で現在分詞や過去分詞の用法とかも教わったのですが、これに関しても少し復習をお願いしたいです。私はまだ完全には理解できていないような気がしていてちょっと不安です。

星: そうですか。例を使って文の形（つまり文構造）を分析しながら、先ず現在分詞から一緒に考えてみましょう。(14)を見てください。

(14) [A police officer] was [passing by]. （進行形）
S V C

星: (14)は現在分詞（V-ing）を使った過去進行形の文ですが、[passing by]の部分は、主語（S）である[A police officer]を叙述・説明する補語（C）と分析することも可能性の一つとしてあるかもしれませんね。(14)は下の(15=8)の第二文型、Mary is prettyと似ていますよね。

(15) Mary is pretty. （メアリーは可愛い）(=8)
S V C

心咲: 確かに、似てますね。(15)でMaryはS、isはV、prettyはMaryというSを叙述・説明する補語（C）だから。

星: 重要なことに、prettyのようなC（補語）のポジションに入る形容詞の多くは、(16)の例が示すように名詞の前などの修飾語（Modifier）というポジションに入って名詞に意味（説明）を付け加えることもできます。ただ、英語ではこの名詞の前の修飾語（M）のポジションにはprettyのような語、あるいはかなり短めの表現しか入れない感じです。「小っちゃなポジション」だと思ってください。

(16) Mary is [$_C$ a pretty girl]. （メアリーは可愛い女の子）
S V M N M N

星: とすると、(17)の分析、どうなるでしょうか。

(17) I saw a police officer passing by.

心咲: (18)のようなSVOC構文（構造）はどうでしょうか（脚注8、(11)参照）。

(18) I saw [[a police officer] [passing by]].
S V [O C]

心咲: このSVOC分析で私は動詞sawの見る対象は人や物（O）ではなく場面やシーン（つまり、OとCが結びついた[OC]のセット全体の出来事を示す「（be動詞・時制が欠けている」小さな文」）と捉えたいです。ですから、日本語訳は「私は[警官が通り過ぎる]の(＝場面)を見た」((14)参照)[15]。(18)では現在分詞表現[passing by]が目的語の「警官」の行為を叙述・説明する補語として使われているから、現在分詞の補語用法という呼び名はどうでしょうか。

星: これは特に素晴らしい分析だと思います。ただ(17)には微妙に違う、もう一つの意味があるようです。先ず(19)を見てください。

(19) *I saw [a [passing by] police officer].
M N

星: (19)が示すように、現在分詞表現[passing by]はN(名詞)の前にあるM(修飾語)の「小っちゃなポジション」には

対応する能動態(iv)が存在せず不適格です。

(iii) *She was broken Ø the toy by him.
(iv) *He broke her the toy.

一方、下記の(v)と(vi)に見られるように日本語の受動態には対応する能動態がある必要がないため、(v)は適格な日本語の受動態です。。

(v) 彼女は彼にオモチャを壊された。
(vi) *彼は彼女にオモチャを壊した。

[14] 自然言語における「曖昧文」についての重要な構造分析はChomsky (1965)等参照。この節で紹介される構造分析は基本的に全て現代言語学の創始者であるNoam Chomskyによるものに依存しています。

[15] この構造分析が正しければ、SVOC構文のOとCは密接に関わっており、[OC]全体が「(be動詞・時制が欠けた)小さな文」であるかのような表現であり、出来事や状態を意味するということになります（脚注8参照）。

(i) Mary made [[John] [happy]] **([OC]=状態)**
S V [O C]

従って、上記(i)の直訳は「メアリーは「ジョンが幸せな状態」を作った」であり、自然な日本語訳は「メアリーはジョンを幸せにした」となるのかもしれません。

入りにくい感じです((16)参照)。しかしながら、英語では名詞の後にもM(修飾語)のポジションがあり、その名詞の後の修飾語のポジションには長い表現が入るようです[16]。ですから現在分詞表現[passing by]が前方からではなく、後方から名詞[a police officer]を修飾する(20)の構造分析が可能になり、(20)で私は場面(シーン)ではなく目的語(O)の「警官」を見たことになります。

(20)　I saw [a police officer] [passing by].
　　S V　O　M
　　↑_____|

星：実際、(17)には「私は[通り過ぎる]警官に出会った。」という解釈もあり、(20)は現在分詞の名詞修飾用法と呼ばれたりします[17]。

心咲：そうですか。英語では前からでも後ろからでも名詞を修飾(説明)できるのですね。驚きました。日本語では前からしか名詞を修飾(説明)できないので、私たちは(20)のような後方からの名詞修飾(説明)表現、英語を勉強する時に注意が必要だと思いました。そして(17)は曖昧で二つの意味があり、一つの意味では動詞 saw が見ている対象は「警官が通り過ぎている」という出来事([OC]全体の「小さな文」)であり、もう一つの意味では動詞 saw の見ている対象は目的語(O)の「警官」。微妙ですが確かに意味は違っている感じがします。これらの二つの意味が私たちの二種類の構造分析、つまり現在分詞の補語用法分析と名詞修飾用法分析で捉えられるのですね。言葉における(17)のような複数の意味がある「曖昧文」、難しいですが非常に興味深いです。

星：それはよかった。それじゃ、過去分詞についても一緒に考えてみましょう。全く同じように構造分析できそうです。先ず(21)を見てください。

(21)　[The boxer] was [knocked out]. (受動態)
　　S　V　C

星：(21)は過去分詞(Vp.p.)を使った受動態の文ですが、[knocked out]の部分は、主語(S)である[The boxer]を叙述・説明する補語(C)と分析することも不可能ではないかもしれません。(21)も(15=8)の第二文型、Mary is pretty と似ていますよね。

(22)　Mary is pretty. (メアリーは可愛い)(=15, 8)
　　S　V　C

心咲：確かに、(21)も(22)に似てます。さっきと一緒で(14参照)。

星：じゃ、(23)はどうですか。分析してみてください。

(23)　I saw the boxer knocked out yesterday.

心咲：分かった。嬉しい。(23)も二つの意味を持つ曖昧文ですね。今度は意味が全然違います。一つの分析は、(24)です。

(24)　I saw [[the boxer] [knocked out]] yesterday.
　　S V [　O　C　]

心咲：(24)でも動詞 saw の見る対象は目的語(O)の人や物ではなく、場面(つまり、OとCが結びついた([OC])全体の出来事を示す「(be 動詞・時制が欠けた)小さな文」)であり、意味は「私は昨日[ボクサーがノック・アウトされる]の(=場面)をこの目で見た」((21)参照)。ここでは過去分詞表現[knocked out]が目的語(O)の「ボクサー」の状態を叙述・説明する補語(C)として使われているから、過去分詞の補語用法と呼びたいです。

星：これも非常に優れた分析ではないでしょうか。

心咲：それで、もう一つの分析は過去分詞の名詞修飾用法の(25)です[18]。(25)で私が見たのは場面(シーン)で

---

[16] 下の(i)と(ii)が示すように、英語では名詞の後の修飾語のポジションでは逆に形容詞の pretty のような短い修飾語(M)は使うことはできませんが、[very much fond of music](音楽が大好き)のような長い表現なら使うことができます。

(i)　*Mary is [a girl], [pretty].
　　S　V　C　M
(ii)　Mary is [a girl], [very much fond of music].
　　S V　C　M

[17] (20)の[passing by]は現在分詞の形容詞的用法の呼ばれたりもしますが、あまりよい呼び名ではありません。英語の現在分詞で比較級形(-er)や最上級形(-est)を持つものはありません((3)参照)。

[18] (i) *I saw [the [knocked out yesterday] boxer].
　　M　N

はなく目的語(O)である人(ボクサー)です。

(25) I saw [the boxer] [knocked out yesterday].
S V O M
↑_____ |

心咲: ですから、(25)の意味は「私は、[昨日ノック・アウトされた]ボクサーと面会した。」で、(25)は過去分詞の名詞修飾用法と呼びたいです[19]。私、またビックリです。この過去分詞の名詞修飾用法の日本語訳だと、私はボクサーがノック・アウトされた場面(出来事)を見ている必要ありません。でも補語用法(24)の日本語訳は、「私は[ボクサーがノック・アウトされる]の(=場面)をこの目で見た」ですから、補語用法の時、私はこの目で必ずボクサーがノック・アウトされるところを見ています。(24)と(25)の意味、やっぱり全然違っています。

星: 心咲さんの分析は、曖昧文(23)に関する一つのとても優れた構造分析だと思います。

心咲: (23)も曖昧でに二つの意味解釈があり、私たちの二つの構造分析、つまり過去分詞の補語用法分析と名詞修飾用法分析で説明できて非常に嬉しいです[20]。文の要素の組み合わせ方の違いで文の意味の違い(曖昧性)を捉える私たちの構造分析は、ブロックを組み換えて遊んでいるようでとっても面白いです(脚注 8、脚注 14 参照; (17), (18), (20)参照; (23), (24), (25)参照)。

心咲: 私、過去分詞の形容詞的用法の勉強をしていた時、受動態と関係があるのかなぁってぼんやり感じていたんですが、その関係も私たちの分析で捉えられた気がします((21)参照)。すっきりした感じです。あと繰り返しになりますが、日本語では名詞の前にしか修飾(説明)表現のポジションがないのにも関わらず、英語では(26)と(27)が示すように、

(26)
a. Mary is pretty.
S V C
b. Mary is [a [$_M$ pretty] [$_N$ girl]].
c. *Mary is [a [$_N$ girl]] [$_M$ pretty].

(27)
a. Mary is [very much fond of music].
S V C
b. *Mary is [a [$_M$ very much fond of music] [$_N$ girl]].
c. Mary is [a [$_N$ girl]] [$_M$ very much fond of music].

修飾表現のポジション(M)が名詞の前((26b)参照)にも、名詞の後((27c)参照)にもあって、名詞の前の修飾表現ポジション(M)には短い語や表現しか使えず((26b)と(27b)の違い参照)、逆に名詞の後の修飾表現ポジション(M)には長い表現しか使えない((26c)と(27c)の違い参照)というもの、とても興味深かったです。

5. おわりに: 物理学、生物学そして言語学

星: 私たちが紹介した、「英語を分析する際の見方、考え方」、皆さんの英語学習における一つの重要な基盤になってくれたら非常に嬉しいです。

星: しかしながら、(i)私たちの分析は、英語のネイティブ・スピーカーの頭・心の中にあって、常にダイナミックに動いている柔軟な「言葉のシステム」を直接的に反映するような分析では決してありませんし(私たちの言語分析に「ダイナミックな動き」は全くなかったですよね)[21]、(ii)誰

上の(i)が示すように、[knocked out yesterday]は N(名詞)の前にある M(修飾語)の「小っちゃなポジション」に入るのは不可能です((19)参照)。しかしながら、英語では名詞の後にも M(修飾語)のポジションがあり、そこには長い表現が入ります。ですから、[knocked out yesterday]が前方からではなく後方から名詞[the boxer]を修飾する分析、(25)が可能になります。

[19] (25)の[knocked out]は過去分詞の形容詞的用法と呼ばれたりもしますが、これもあまり良い呼び名ではありません。英語の過去分詞で比較級形(-er)や最上級形(-est)を持つものはありません((3)、脚注 16 参照)。

[20] 英語の曖昧文(23)の二つの意味は、(24)と(25)の説明が示すように、日本語訳ではっきり二つ、つまり補語用法訳と名詞修飾用法訳に区別できます。ですから、(23)のような曖昧文を学習する際には、きちんと日本語に訳し分けて理解することも非常に有効です。英語学習には私たちの母語である日本語も、できる限り有効に使ってください((17)、(18)、(20)も参照)。近年の日本における英語教育では、「英語を英語で教える」ことばかりが強調されている気がします。ここで英語教育における「日本語利用の有効性」について指摘しておきます。

[21] 私たちの頭・心の中にあって、「常にダイナミックに動く柔軟な言語(情報処理)システム」に関する理論は、Kempson

かが実験などで英語のネイティブ・スピーカの頭・心の中を直接に見て確認したわけでもありませんから、(iii)正直言って、私たちの分析は単なる一つの「辻褄合わせ(机上の空論や理屈)」と反論されても仕方がないものでもあります。さらに、いつか言語学にもコペルニクスのような研究者が現れ、私たちの分析全て根っこから覆されることも十分ありうると思います[22]。

星：ただ私たちが紹介した品詞(ラベル名、背番号)、文法役割(文中のポジション名)、意味役割(「動作主」や「動作の受け手」)、文構造という文法概念は、少なくとも現時点で私たちが言葉の特質を正しく捉えるためには非常に有効なものかもしれないと言うことはできるような気がします。

心咲：私もそんな感じがしました。最後に大切な質問があります。今回学んだように、英文を一文一文、丁寧に分析して読むのは時間がかかるし、とても大変だと思うのですが、こうして丁寧に英文を読んだら、きちんと意味が理解できるし、きちんとした英文を組み立てられる気がします。今日みたいに勉強していたら、いつか英語で書かれた本にある英文全部、筋道立ててきちんと分析できたり、英語で論文を書いたりできるのでしょうか。

星：私たち英語のノン・ネイティブ・スピーカーは、ただ英語を聞いたり話したりするだけでは英語をマスターすることはできないと私は思います。心咲さんと私とで勉強したように時間をかけて、きちんと考え母語である日本語を使ったりしながら学び、英語のメカニズムを理解する努力をした上で、英語のコミュニケーション活動を積み重ねれば英語をかなり自由に使えるようになるのではないでしょうか。私たちヒトは言葉を柔軟に創造的に使ってコミュニケーションを取っていますが、そんな人間のコミュニケーションは非常にしっかりしたmechanism(仕組み=文法)に支えられています。

心咲：そうですか。とっても嬉しいです。実は私、英語はちょっと苦手だったのですが、このように一歩一歩勉強することならできる気がします。頑張ってみます。

心咲：私、附属中学校の国際情報科学部の科学コースに所属していて、私たちの世界の見方を激変させたアナクシマンドロス、コペルニクス、ダーウィン、アインシュタイン、ハイゼンベルクは私たちが尊敬する科学者です。これらの偉大な科学者のように将来誰かが言葉の見方を大きく変え、私たちが紹介した分析を根っこから覆すような素敵なことがあるなら、私の生きているうちに起こってほしいです。私は実際にそれを見てみたいです。物理学や生物学同様、私もそんな驚くべきこと、世界の一部である人間の言葉の研究でも起こりそうな気がします。

主要参考文献

Biber, D., S. Conrad, & G. Leech (2002) *Longman Student Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Japan.

Cann, R., R. Kempson, & L. Marten (2005) *The Dynamics of Language*, Elsevier.

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press.

Huddleston, R. & G. K. Pullum (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*, Cambridge University Press.

Huddleston, R., G. K. Pullum, & B. Reynolds (2022) *A Student's Introduction to English Grammar*, Cambridge University Press.

Kempson, R., W. Meyer-Viol, & D. Gabbay (2001) *Dynamic Syntax: The Flow of Language Understanding*, Blackwell Publishers.

Lyons, J. (1981) *Language and Linguistics: An Introduction*, Cambridge University Press.

Rovelli, C. (2019) *The Order of Time*, Penguin Books.

Rovelli, C. (2021) *Helgoland*, Allen Lane.

Summary

This is the result of the educational practice carried out at Akita University Junior High School (AUJHS) in 2023. Its teaching style was the one in dialogue, which is the classical teaching style used since the ancient Greek era, still widely used in the West. In the summer of 2023, students from the Faculty of Education and Human Studies,

---

et al. (2001), Cann et al. (2005)等参照。

[22] 1904年アインシュタインは25歳の時、マクスウェルの電磁気の方程式にある時(time)の変数に関するちょっとした奇妙な特徴に気づきそれを真剣に受け止め、人類で初めて「静止している物体と比べると、動く物体の場合、時の進行が遅い」と提唱しました。この世界を驚かせた考えは、アインシュタインが亡くなって約20年後の1970年代にジェット機と高性能の時計を使って証明されました(Rovelli 2019参照)。皆さんのうちの誰かが言葉に関してちょっと不思議な特徴を見つけ、それに本気で取り組んで言語学上の大発見をするかもしれません。

Akita University were giving an English lesson to third-year AUJHS students. When I visited the class, Misaki Sato, who was sitting at the back of the room, dared to give me straightforward questions such as "what is transitive verb?", "what are five sentence patterns?", etc. Since it was not practicable to fully answer the questions in the classroom then, I told Misaki to come to the headmaster's room, which I was occupying, after school, for fuller explanation and any further questions. Every Tuesday after school for nearly three months since then, Misaki visited me with not only questions concerning the basics of English grammar, but also those that get to the essence of human language. To all those questions, I tried to give her the fullest possible explanation. Misaki and I had many pleasant conversations abundant with interesting insights, linguistic and philosophical. It was also a good opportunity for me to contemplate how to overcome the difficulty and the limitations of teaching English in English. On 6th December, 2023, Misaki and I had a chance to demonstrate how we studied English by dialogues and to share with all the third-year students what we learned. It was a rare opportunity for me as headmaster to teach English at AUJHS and I enjoyed the undertaking very much. It was a good occasion not only to aid students in learning English grammar but also for students to teach and learn from each other. This paper was also used as a material in my course of English linguistics at Akita University. It was warmly welcomed by the university students, who said: it will be very useful for their future practice as English teachers, for what the paper shows is not the same as the usual cut-and-dry grammatical instructions, but it goes into the essence of language revealed in the learning processes in the dialogues.

Key Words : English grammar, linguistics, philosophy of language, categories, grammatical functions, semantic roles, clause structure

英文タイトル

The Mechanism of English: Categories, Grammatical Functions, Semantic Roles, and Clause Structure

Akita University